

「雀合戦」考

要 旨

本稿は、「雀合戦」と呼ばれる雀が群がって争う現象の情報について論じるものである。雀合戦は、繁殖を終えた雀が秋以降に集団で増入りするもので、雀の一般的習性である。にもかかわらず、近世以降に江戸周辺でしか文献に見られないのは歴史的・文化的理由がある。この現象を最初に「合戦」という名付けをした遠州からの書状が江戸に到来し、流布したことで、それが鋳型となって天保三年（一八三二）に江戸で発生した雀の集団行動が「合戦」と理解された。「合戦」とする情報の偏在が、報告される雀合戦事例の地域的な偏りにつながったのである。「雀合戦」の噂が江戸周辺に偏在しているのは、情報が江戸に集まりやすいことに加えて、情報をストックしている知識人が多いことが原因であろう。

キーワード：雀合戦、異類合戦、書状、曲亭馬琴

はじめに

雀合戦とは、雀が群がって争うことをいい、雀戦ともいう。「日本国語大辞典」の第二版では、用例として『視聴草』（一八三〇年）な

どが挙げられている。

動物などによる「合戦」のような集団行動は古来より怪異とみられ、蛙合戦や蟻、蜂などの「戦い」が中世の古記録にも記されてきた。⁽¹⁾

中世から史料に確認できる蛙合戦については、笹本正治も言及しているのだが、⁽²⁾雀合戦については比較的新しいの中世史料で確認できず、⁽³⁾研究もほとんど見られない。民俗学者の木村博による「『雀合戦』『蛙合戦』『雀合戦』」が雀合戦を表題にもつ唯一の作品であるが、⁽⁴⁾明確な論旨はなく事例から想起される感想と疑問を任意に羅列したもので随想の域を出ない。

その後、雀合戦そのものを主題としたものではないが、伊藤慎吾は「異類合戦物」に関する論文のなかで、近世の随筆『耳囊』所載の雀合戦についても言及している。⁽⁵⁾伊藤論文では、『耳囊』の記事についての位置づけは明快ではないが、技巧を凝らした文体の早期の例として挙げていることから、その後展開していく近世における中世軍記物のパロディとしての戯作や戯文などの

*村 上 紀 夫

異類合戦物の萌芽としてとらえていると思われる。

雀合戦について、木村は「まず生物学的な調査から始めなければならぬのであろう」とするが、この現象について、鳥類学の三上修によれば、繁殖を終えた秋以降の雀は、集団を形成し、雀の群れが増え入りする際に乱舞する様子を江戸時代には「雀合戦」と呼んでいたという。^⑤ 雀合戦と称される現象は、特殊なものではなく雀の一般的習性であるといえよう。また、秋に雀が群れを作って行動することは、正徳二年（一七二二）成立の絵入り百科事典『和漢三才図会』巻四二の「雀」の項でも「八九月群飛田間」と記されており、江戸時代の人びとも知っていたことである。では、「雀合戦」が近世になってあらわれるのはなぜであろうか。

となれば、木村が文中に記していた、雀が全国にいたにもかかわらず、「雀合戦」の見聞が江戸に片寄っているように見えるのも気になる点である」という疑問は、素朴ながらも検討に値するのかもしれない。^⑥ 「雀合戦」が一般的習性であるにもかかわらず、近世以降に、そして江戸中心にしか見られないのならば、時間的・空間的の偏在は歴史・文化的な影響を考える必要がある。

木村は極めて限られた史料しか見ていないので、まずは議論の前提として本稿では雀合戦に関する記録をできるだけ集め、その実態を明らかにしたい。その上で、本稿では雀合戦の情報は江戸近辺に限定されているのか、情報が関東圏に限定されているとすれば、その理由はなぜなのかを検討してみたい。

一 遠州見附

まずは『日本国語大辞典』の用例として掲載されている『視聴草』の記事を確認しておきたい。舞台は東海道の宿場である見附宿（現・静岡県磐田市）近辺にある森町大洞院である。

【史料1】^⑦

（異筆）「文化十二頃か 雀合戦」

① 森町

大洞寺

右境内奥八町斗之間雀合戦有之、其有様誠ニ珍事ニ御座候、右合戦去月廿九日迄六日之間、日々あつまり東西ニ別レ戦ひ申候、西方之雀者鳩程も有之、東西（方）之雀ハ平生之雀也、凡町数五六丁の間を隔、此方又鳶鳥集り居、打死之雀をくわんとす、雀勢ひ強ク不叶鉢ニ而一昨日之合戦ニ東方之雀を取らんとするに一羽の雀、鳶の頭ニ喰ひ付、其間ニ又々十羽程雀一むれ来りたちまち鳶を追散シ一羽の鳶既ニあやうき所江西方之大雀七八羽飛来り漸々鳶を助ケたり、誠ニ珍敷見物之人數夥數十町程の間者爪も不立、先荒増申上候

二月五日

猶以合戦初リハ昼七時過入相の鐘を限りて戦ひ申候、大洞寺江御参詣御見物御出待入候

見附宿

銀蔵

浜松宿

御問屋中様

②一見附宿近辺ニ森町と申所に東西二十町斗之野原御座候、右之広

野ニ而去月廿九日雀合戦御座候由、私屋敷元メ之者通行之節

見物致し候処、誠ニ前代未聞之事めさましき珍事ニ御座候由咄

ニ承り申候、右元メ一昨日当地着いたし候、定而其御地江者最

早相知候半哉与奉存候得共、珍敷事ニ御座候間申上候、別紙之

書状ハ浜松問屋ニ而元メ写参候ニ付、一寸写差上候、誠ニ実事

ニ御座候間入御覽申候

二月十四日

村松十次

この史料は、二つの部分からなっている。②が村松十次なる人物が「元メ之者」が見たという雀合戦について伝え、その参考として「元メ」が浜松の問屋で写した書状を送ると伝えている。①は、その浜松問屋で元メが書き写した書状である。見附宿の銀蔵なる人物から隣の宿場である浜松に届けられたもので、森町大洞院における雀合戦の様子が詳細に報告されている。

正月二十九日ころから「雀合戦」が見られるようになったという。時間帯は七つ時から「入相の鐘」までというから、夕方から日没までの現象である。季節的にも雀がつがいを作り始めるにはやや早い時期なので、三上修が指摘していたように一群の雀が聳入りする様子を雀合

戦といっているのであろう。森町大洞院も見附宿から北にある山間部に所在しているから、雀の聳があったとしても不思議はない場所である。雀の群れが聳入りするタイミングを狙って、鳶や鷹などの猛禽類が集まってくることも珍しいことではない。何らかの事情で大洞院で集団が特に大きくなるようなことがあったかもしれないが、自然現象として十分に理解可能なものだった。¹⁰⁾

とはいえ、ここで興味深いのは雀合戦の詳細情報が、見附宿銀蔵↓浜松問屋↓(元メ)↓村松十次↓某と既に四人を経由して伝わっている点である。いわば、「友達の友達」というかたちであり、都市伝説としての要素も持っていたのである。

この書状が『視聴草』に掲載されていることも重要である。『視聴草』は、幕臣の宮崎成身が文政一三年(一八三〇)から編纂をした雑録である。この書簡は、江戸で異事奇聞を伝える情報として読まれていた可能性がある。しかも、端に「文化十一二頃か」とあるように、どうやら同書の編纂時点ではいつの頃かはわからなくなっていたようだ。

なお、文宝堂の随筆『筆満加勢』巻一九にも、やや異同はあるが、同じ見附宿からの書翰が書き写されているが、¹¹⁾ここでは、「文化五戊辰年」の記事に続いて「同三月初旬風説」とあるので、文化五年(一八〇八)のできごとだった可能性が高い。

この見附宿からの書状が江戸で珍事を伝えるものとして流布していた可能性を示唆するのが次の史料である。

【史料2】¹²⁾

雀軍の事

文化五年四月遠州見付宿の辰蔵といへる、浜松の間屋へ贈り状を、予が許へ来る是雲と称す法師の語り見せける。其文に、森町大洞院の奥八丁斗りの間、雀合戦有て、其有様誠に珍らし。東西に分れ、西方の雀の内に鳩ほど有るもあり。東は平常の通。又凡五、六町程隔て鳶・鳥集り、右斃たる雀を取喰はんとするを、鷹来て鳶・鳥を逐ふて相戦ふ。雀の勢ひ強く、鳶も鷹も叶はざる体也。一昨日の合戦に、東方の雀を取らんとするを、雀壺羽鳶のかしらへ喰付、其内に外の雀戦ひを忘れて鳶に取かゝる。西方の雀七、八羽飛来り、漸く鳶を助けたり。誠に討死せし雀の数多く、今日迄六日程の事に候。其辺茶屋・飴売夥しく、見物人拾町斗の間、誠に爪も立不申。尤合戦の始り、昼七つ時分より入相の鐘を限のよし認たり。昔より鳥獸・虫介の争ひ戦ふ事もあれど、雀の戦ひ鳶・鷹の助力も珍らし。辰蔵が作り事なるや。奇成事なれば爰に記す。

ここでは、『筆滴加勢』と同じく文化五年（一八〇八）のこととし、情報源を「銀蔵」ではなく「辰蔵」としている点では相違するが、内容面からいえば明らかに【史料1】と一致する。傍線部の「浜松間屋へ贈り状」とは【史料1】の①にあたる部分であろう。

このように森町大洞院での雀の集団行動が、文化年間に見附宿から「雀合戦」と名づけられた上で一種の異事奇聞として書状で伝えられた。その書状が、広く書写されて複数の回路で江戸に伝えられていた

のである。

二 江戸湯島——天保三年——

江戸での雀合戦は、文政七年（一八二四）七月に小石川馬場や加賀藩邸、湯島根性院で雀（図1）とムクドリ（図2）の「合戦」があったとされるのが早い事例だろう。場所は本郷の周辺である。^③この時は雀同士争いではなく、雀とムクドリの戦いだったという。一時は評判になっていたようで、見物人が群集していたという。

その後、江戸で雀合戦が話題に上ったのは天保三年（一八三二）のことであった。^④その時の様子を伝えるのが曲亭馬琴による随筆『兎園小説別集』である。

【史料3】^⑤

雀記、雀戦

天保三年壬辰秋八月六日より、同月十日比まで、湯島麟祥院〔号天沢山〕の隣寺〔寺号をわする。なほたづぬべし〕の森にて、雀数千隻宿せしが、雀戦起りしより、処々の雀集り来て数万に及び、くひあふ事夥し。その声、遠く本郷御弓町、水道橋迄までも、くつわ虫の遙に群鳴く如く聞えしとなり。吾友木黙老人の家人国越某、同月六日の夕つかた、はからずその寺の頭りをよぎりて、目撃せしよし。その翌七日、老人より消息のついでに告られにき。又一友人鈴木有稔の近隣某も目撃せしに、雀は森の中に在り、外



図2 ムクドリ
(筆者撮影)



図1 スズメ
(筆者撮影)

の方よりうち見られれば、くひあふ処、定かには見えざりしが、そこらの樹の下にくひ殺されし雀、木の葉の散たるやうに見えたりとぞ。「風聞には死したる雀、米苞に三五俵有しといへり。追考余録第二卷にしるす。合し見るべし」ある人、このことを板にゑらせんとて、有稔子に画を誂へしが、彫工いまだ成を告げずといへり。(下略)

馬琴は、湯島であったという「雀合戦」について伝えている。情報のひとつは木黙老人で、家人の目撃情報を消息のついでに馬琴に知

らせたという。木黙老人とは、

讃岐高松藩家老の木村黙老である。もう一人は、馬琴の友人である鈴木有稔の「近隣某」の目撃情報であった。

天保三年（一八三二）の湯島で発生した「雀合戦」は松浦静山による『甲子夜話続編』でも報告されている。¹⁶⁾「世上風説す」とあるから、江戸では評判になっていたようだ。静山は「林氏の文通もこれに及ぶ」と記しているが、ここでいう「林氏」とは静山と親

交しかつた林述斎である。述斎は湯島にあった昌平齋とも深い関わりがあつた儒家だから、情報は信頼に足るものだっただろう。好奇心旺盛な松浦静山は人を派遣して現地で詳しい話も聞き取らせていた。

馬琴の情報では「寺号をわする」とあり、場所は明確に示されていなかったが、松浦静山の随筆『甲子夜話続編』巻八二によれば、「湯嶋切通しの傍ら根性院と云る、都下真言四ヶ寺の中なる寺内のことなりと云」と記されている。とすれば、そこは八年前の文政一三年（一八二四）にも雀とムクドリの「合戦」で評判になつた場所である。雀の集団罫が形成されやすい場所があつたのだろう。

なお、馬琴は後述する書状で、「雀合戦」があつたという寺院が「平生雀のねぐら」であり、「ふとくひあひはじめ」たと記している。¹⁷⁾しかし、馬琴の「友人」であつた鈴木有稔の「近隣某」の目撃では、雀が「くひあふ」といわれているが、実際には「くひあふ処」ははっきりと確認できなかったようだ。ただ、木の下に多数の「くひ殺されし雀」の姿があつたのを見たという。この事実も、この「雀合戦」が、雀の集団による罫入りであつたことを示唆している。雀の死体は、群れでの罫入りを狙つて集まつた猛禽類に捕食されたものであろう。雀同士の「合戦」が行われていたわけではなかつたにもかかわらず、雀の遺骸が大量にあるのを見た人が、「合戦」を連想して「討ち死に」だと解釈したと考えられる。

松浦静山も、雀とムクドリが前衛・中軍に分かれて整然と戦つていくという噂に対して、「この言見る者の心よりして、軍陣のことに思

ひ合はするにて、附会せる也」と語っている。¹⁸⁾「見る人」が合戦だと思っ
てみるから、そのように見えるのだということである。

それでは、この湯島根性院における雀の集団狩入りが「見る人」に
「軍陣」を想起させ、「合戦」ととらえられたのはなぜか。実は、この
「雀合戦」にかかわつての情報収集をする過程で、松浦静山も曲亭馬
琴も【史料1】の遠州森村大洞院での「雀合戦」を伝える書状を見せ
られているのである。静山は知人から【史料1】の写しを送られてお
り、¹⁹⁾馬琴は伊勢松坂の小津桂窓からの書状で遠州であった「文政
十二三年の頃」の「雀戦」について知らされている。²⁰⁾

つまり、江戸で雀の集団狩入りが発生した際には、類似の前例とし
て遠州の事例が参照されうる環境があったということになる。【史料
1】の書状が化政期に江戸に伝えられて一定程度の流布をしていたと
すると、事前に「雀合戦」という語彙が江戸の人びとの間では浸透し
ていた可能性がある。これが類型となり、天保三年（一八三二）に、
雀が前例のないほどの大規模な集団を形成して飛んでいる不可解な状
況を見た人びとは、過去に報告されていた「雀合戦」という語彙を想
起するだろう。未知の現象に対して、既知の「雀合戦」という名付け
がなされたことで、初めて見る現象であっても理解の範疇にとどめて
おくことができる。すると、ただちに各方面で根拠となる【史料1】
が再発見されていき、情報として共有されるようになることで、「雀
合戦」という理解が定着していく。無論、「雀合戦」が違和感なく受
けとめられたのは、蛙合戦のような動物による「合戦」とみられる現

象が他に知られていたこともあったと思われる。

三 情報の収集と分析——馬琴と松浦静山——

天保三年（一八三二）八月の「雀合戦」に関する噂を聞いた馬琴は、
それを友人で実見した者もいて「是実説に御座候」として、「蛙合戦
ハ和漢二度々有之候へ共、雀合戦ハめづらしく覚候」と伊勢松坂の桂
窓の友人に書状で知らせた。²¹⁾九月のことである。その際、馬琴は「篠
斎子ハ好奇の人ニ候間、此義も御噂可被成下候」と「篠斎」へも伝え
てほしいと頼んでいた。²²⁾

書状の宛先になっている桂窓とは、小津久足のこと、伊勢松坂の
豪商で本居春庭の門弟で、蔵書家として知られていた。篠斎とは殿村
安守のことで同じく伊勢松坂の国学者にして本居宣長の門弟である。
いずれも、馬琴の友人で伊勢松坂の知識人であった。

これに対して、翌年の天保四年（一八三三）二月下旬に殿村篠斎か
ら書状が届き、また、殿村篠斎も松坂で情報収集（「聞合」）をして、
馬琴に「書付」を送付した。²³⁾馬琴は早速、その情報を自身の随筆『兎
園小説余録』に掲載した。²⁴⁾

小津桂窓からは、前述のように「文政十二三年の頃、遠州秋葉山街
道森村といふ所にて、雀戦ありしよし」という情報が伝えられた。こ
れは地名、年代から見て明らかに【史料1】の情報である。

一方で、篠斎がもたらした情報は、次のように近隣での様子を伝え

るもので、馬琴がいう「雀合戦」のような現象は「不珍」とするものであった。

【史料4】

覚

凡四十年前

一 津古川と申所え雀夥敷集り候よし

廿七年前

一 神戸領高岡村え夥敷集り、四五町四方え鳴声聞え候よし

五年以前

一 御領分郡山村

是は双方藪へ集り、折々食合、少々死鳥も出来候よし、最六七

日の間に候由

去卯六月末より七月初迄

一同円心寺村

島中又は藪へ夥敷集り、島場荒し候に付、近村へ毎日人夫十人

宛、追人出し候由、是又折々食合、少々づ、は死鳥も出来候て、

鳴声三四町四方へ響候由に御座候

一 玉垣村の儀者聞合候処、存知者無御座候

一 江戸当年集り候者、むく鳥に御座候

右の通、模寄の者に相尋候処、実説に御座候、在中には前段の事

共、折々御座候由、不珍抔と申居候、中にも前申上候者、其内目

立候筋にて、見物に罷出候者も御座候也

辰十二月十八日

市兵衛

佐六様

この書状は、よく見れば「雀合戦」と呼ばれるような「食合」が生じている現象に限るものではなく、雀が大規模な集団化した事象が散見されることについての報告である。とはいえ、馬琴にとって伊勢松坂からの「不珍」という情報は決定的だったようだ。

馬琴は、情報提供に感謝するとともに、篠斎に対して春に雀の雛が多く育てば、夏秋に「ねぐらを争ひ、群戦いたす」ことがあるとし、「遼東之冢同様之談にて、一笑いたし候、かゝる事、世には多かるべく候」と述べている。⁽²⁶⁾

なお、松浦静山は前述のように「合戦」と見えるのは「見る者の心」と論じていた。静山は、湯島根性院での「雀合戦」について、「或説」として一昨年に同寺で殺された「納所の僧」の怨念によるものだという噂も聞いていた。殺された僧の三回忌にあたるというが、「実否弁ずべきならざれば」とし、「釈尊の天眼に非ざれば実否は知れず」と静山の態度は極めて慎重である。さらに、「文政十二三年の頃」の遠州であった雀合戦を知って、「文政十二年乙亥」から逆算すれば、三方原の合戦から二四四年、長篠の合戦から二四一年で、ほぼ二五〇年にあたるので「是らもかの戦死、二百五十年の旧魂と云とも可ならん」とする。戦場の亡魂が成仏することなく、死後も戦い続けるという話は珍しいものではなく、⁽²⁷⁾発想としては突飛すぎるといふほどではない。ただ、その後に静山は「博祭々々」と続けている。これは「一祭を博

す」、つまりお笑いぐさなることの意なので、本気で論じているというよりは、ちよつとした思いつきを披露しているという程度であろう。実は、静山は真相に関わる重要な情報を林述斎から聞いていた。述斎は雀合戦について飛び交う噂を「冷笑」して、次のように説明したという。

【史料5】

東台本坊災後の造構、此節専なれば、山中の雀栖所を失へるなるべし。因て佗に栖止を覓るよりして、湯嶋辺へも行たるべし。然に旧林の雀あれば、新宿の雀を拒しならん。其外に何たる訳あるべからず。

つまり、当時は上野寛永寺本坊の再建工事が進むなかで、境内を聳としていた雀が居場所を失い、近隣の湯島へ移動したと林述斎は語っているのである。事実、寛永寺と湯島根生院は極めて近い場所にある(図3)。その結果、もともと湯島を聳としていた雀と、新たに寛永寺から移動してきた雀の群れが、限られた聳となる木をめぐって競合することになったのだろう。

かかる情報から、松浦静山は馬琴と同様に「雀合戦」とされている現象について、とりたてて珍しいものではないと判断していたようだ。当時の知識人は、不思議な現象に遭遇した際も、情報を収集したうえで、過去の記録や地方での事例と比較検討し、最終的には合理的な解釈に落ち着いていたことがうかがえる。

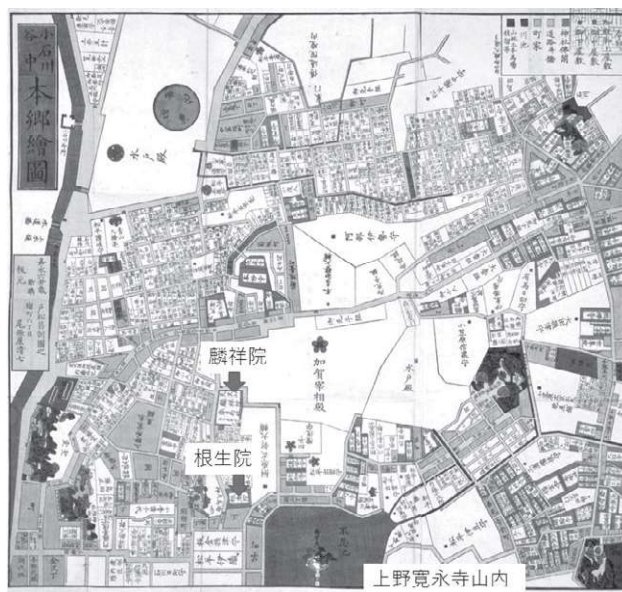


図3 江戸切絵図「本郷湯島絵図」(国立国会図書館蔵 請求記号:本別9-30)に寺院名を加筆

四 雀合戦を伝えるメディア

松浦静山が湯島根生院での「雀合戦」を知ったのは、まずは「世上風説」によって、すなわち噂からであった。林述斎からの「文通」でも言及されていたが、「未だ実否を知らず」という静山は、「人を使し」て「詳しい情報を集めている。その後、次々と「奴僕」の目撃情報や知人で儒学者の朝川善庵からの門人の見聞などが寄せられている。

馬琴の場合も友人の木黙老人から家人の見聞が伝えられ、鈴木有詮

の近隣の目撃談を伝えられたことで知っている。まず、第一報は知人・友人からの口頭によるコミュニケーションである。

また、松浦静山は「世上の説」なども書き留め、馬琴も「風聞」を記録しているから、信頼しうる親しい友人からの情報以外にも、多様な人びとから噂は耳にしていたと思われる。噂の発生源として想定しうるのは、「雀合戦」を見に集まっていた見物客であろう。寺院周辺で見られた雀の通常と異なる特異な行動と、三年前に寺院で発生した殺人事件を想起した人びともそのなかにいたことであろう。

続いて、馬琴は書状によって遠方からの情報を集めはじめ、松浦静山は知人友人のネットワークを使って「雀合戦」について知ろうとした。ここで、書状が重要な役割を果たしていた。静山は初期から林述斎からの「文通」によって、雀合戦の情報に接していたが、さらに知人から過去に遠州で発生していた「雀合戦」についての村松十次による書状【史料1】の写しを示されている。

先に見たように、こうして過去の「雀合戦」と記した書状が再発見されたことで、雀の群れによる行動は、「雀合戦」という呼称を与えられ、「見る者の心」もそこに軍陣を想像し、目にした光景を「合戦」の文脈で語るようになっていく。

馬琴は書状で伊勢松坂から情報を仕入れた。重要なのは、馬琴が篠斎から届けられた書状を自らの随筆にそのまま転載していることである。【史料4】をよく見ると、宛名は佐六ニ篠斎となっている。つまり、篠斎は、自らが受け取った書状そのものか、その写しを馬琴に提供し

ていたのである。

【史料1】や【史料4】のように、私信が書写されたり、書物に引用されて、その情報が受信者の手を離れて広がっていたことに注意したい。書状といえ、発信者と受信者との間で完結する私的なコミュニケーションのように思われがちであるが、そうしたイメージをこえて広がりを見せている。むしろ、宮地正人が指摘していたように、内容によっては書状も遠方での出来事などを知らせる一種のニュースメディアとして、想定以上に広く読まれていた可能性がある。⁽²⁶⁾ 発信者も時に公開されることを念頭に書状を認めていたことも考えておく必要がある。⁽²⁷⁾ 書状は、不特定多数の間で流布する信頼に値しない噂ではなく、個人的な信頼関係のなかで発信された見聞であるとみなされたことで、より正確なものと認識されて、情報を必要とする人の間で広く読まれ、書写されて情報が共有されていったと考えられる。

馬琴や松浦静山は、情報収集を経て、最終的にはありふれたことだと理解したようだが、こうした冷静な判断が必ずしも広く共有されていたわけではないだろう。

不特定多数を対象とした一種のマスメディアといえる瓦版や錦絵として、情報が流布される計画もあった。興味深いのは、【史料3】によると、「雀合戦」を「板にゑらせん」としていた者がいたということである。既に絵は準備できていたが彫工の都合で刊行には至っていないと馬琴は伝えている。その後、実際に刊行されたか頓挫したのかについて馬琴は記していないが、絵入りの瓦板などで情報が拡散して

いけば、「雀合戦」のイメージはより強固に定着したことだろう。

ここで「雀合戦」という情報が、書状によって伝達されていたことに注意したい。想起されるのは、ブルンヴァンがゼロックス・ロアと呼んだ、一九六〇年代から見られたタイプライターや手書きの話がコピー機による複写で流布した都市伝説の存在である²⁹⁾。また、松田美佐はチラシによる噂として、一九七〇年代のヨーロッパ諸国で確認された食品添加物に関するチラシや一九八〇年代から日本で流布した当たり屋のチラシを紹介している³⁰⁾。印刷物を伴えば、噂は口頭で伝達されるもの以上に詳細で具体的な情報を伝達することになり、それだけ真実味を増すことになる。印刷物による噂の流布が一般化する背景には、松田も指摘するように文書を大量に複製できるワープロやコピー機といった事務用品の普及が考えられなければならないが、近世においては書状の書写という方法で、同様の詳細情報を伴う噂が広がっていたことになる。

口頭のコミュニケーションと相違して、書状には記録性がある。同時期における情報伝達としての役割を終えても、書状そのもの（や写し）が保管されていれば、その情報は失われることはない。後日に類似の事態が発生したときに、過去の書状が再発見され、異なった読み方をされることもありうるのである。遠州見附の「雀合戦」についての書状が、後年の江戸根性院で発生した雀の集団行動を説明する「史料」として新しい意味を持つように。

このように考えれば、冒頭に挙げた木村博の「『雀合戦』の見聞が

江戸に片寄っているように見えるのも気になる点である」という疑問にも答えが出せそうである。「雀合戦」が江戸周辺だったのは、雀の集団行動を「雀合戦」と名づけて解釈した遠州の「雀合戦」に関する情報が東海圏を中心に東日本に偏在していたからではないだろうか³¹⁾。「雀合戦」情報が既に行き渡っていたことで、雀の群飛を「見る者の心よりして、軍陣のことに思ひ合はする」ことになったのである。

このような先入観を持たない者には、雀の群れが必ずしも合戦に見えることはなかっただろう。実際、寛政年間（一七八九～一八〇一）に京都の嵯峨天龍寺でアトリが群飛し、見物人が多数訪れていたことが報告されているが³²⁾、京では「合戦」などという表現がされることはなかった。それどころか、文化二、三年（一八〇五、六）頃の京都嵯峨には鳥の群れが現れた年に飢餓がないことから「豊年鳥」と呼ばれていた³³⁾。京では、鳥の集団行動に対しては、不穏な「合戦」とは大きく異なる吉兆のイメージが重ねられているのである。

おわりに

雀が集団を形成し、競って罫に入るのは一般的習性なのだが、それが大きな集団を形成した時に「合戦」であると認識したのは人間であった。この現象に対して、恐らく最初に「合戦」という名付けをした遠州からの書状が江戸に到来して流布していくと、それが鋳型となって天保三年（一八三二）に江戸で発生した雀の集団行動も「合戦」と理

解された。「合戦」とする情報の偏在が、報告される雀合戦事例の地域的な偏りにつながったようだ。「雀合戦」の噂が江戸周辺に偏在しているのは、多様な回路で情報が江戸に集まりやすいことに加えて、情報をストックしている知識人が多かったことが原因であろう。

ところで、雀の集団行動そのものは一般的な習性であるから、その後も大きな群れを作ることにはあつただらう。その群れを見て「合戦」を想起するか否かは、おそらく見る側の意識と深く関わっている。

馬琴や松浦静山が報告していた天保三年（一八三二）以降も「雀合戦」とされる現象は確認できる。興味深いのは、いずれも風雲急を告げる政情のなかで、現実の「合戦」が目前にある時期だった。「雀合戦」は、幕末の文久三年（一八六三）六月、そして慶応元年（一八六五）六月末に駒込や武蔵国・下総などで見られている。文久三年（一八六三）といえば長州が外国船を砲撃したところである。慶応元年には、「大君の長州征伐に擬して作れる者ならん歟」ともされているように徳川家茂の進発を伴う長州征伐の時期であった。

明治一〇年（一八七七）六月下旬から東京北本所番場町の個人宅でムクドリと雀が戦ったとされ、「椋鳥雀大合戦」という戦う鳥を擬人化した錦絵も作成されている（図4⁽³⁷⁾）。いうまでもなく、その時期は西南戦争のまっただ中である。また、永井荷風が招魂社境内で雀合戦を見たのは昭和六年（一九三一）だが、この年には九月に満州事変の発端となった柳条湖事件が起こっている。

こうした事例は「雀合戦」が、松浦静山のいう「この言見る者の心



図4 「椋鳥雀大合戦」（国立歴史民俗博物館蔵）

よりして、軍陣のことに思ひ合はするにて、附会せる也」という言葉を想起させる。⁽¹⁰⁾「軍陣」を強く意識する時代の空気が、「見る者の心」にはたらきかけて、雀が群れを作つて集団で囀りをする通常の行動を「合戦」と見せていたのであった。

註

- (1) 伊藤慎吾「異類合戦物の表現」(同『擬人化と異類合戦の文芸史』三弥井書店、二〇一七年)
- (2) 笹本正治『中世の災害予兆』吉川弘文館、一九九六年。ほかに、前掲注(1)伊藤慎吾論文でも中世以前の動物による「合戦」について史料を挙げて論じている。
- (3) 木村博「『蛭合戦』『蛙合戦』『雀合戦』」(『西郊民俗』第一五〇号、一九九五年)
- (4) 前掲伊藤慎吾論文
- (5) 三上修『身近な鳥の生活図鑑』(ちくま新書、二〇一五年、六一―二頁)、同『スズメ』(岩波書店、二〇一三年、五八頁)
- (6) 『和漢三才図会』上巻、東京美術社、一九七〇年、四八一頁)
- (7) 前掲木村論文
- (8) 『視聴草』五集之九(『内閣文庫所蔵史籍叢刊 特刊第二 視聴草』第五卷、汲古書院、一九八五年)
- (9) 雀は新暦の二月頃に群れを離れ、つがいを作つて子育ての準備を始める(前掲、三上修『スズメ』)。
- (10) 「鳩程」の「雀」とは、おそらく雀と同様に群れを作り囀りをする茶褐色の鳥であるムクドリだろう。後述するように、後の「雀合戦」では、ムクドリと雀の合戦があったように伝えるものもある。
- (11) 国立公文書館所蔵『筆満加勢』巻一九(請求番号二一四一〇〇九、〇〇二〇、国立公文書館デジタルアーカイブにて閲覧)。文章が【史料1】を簡略化したものになっており、発信元を「銀蔵」ではなく「辰蔵」としている。
- (12) 長谷川強校注『耳囊』下巻、岩波文庫、一九九一年、一〇一―二頁
- (13) 『宮川舎漫筆』(『日本随筆大成』第一期第一六卷、吉川弘文館、一九七六年)
- (14) 斎藤月岑の『武江年表』巻八(今井金吾校訂『定本武江年表』中巻、ちくま学芸文庫、二〇〇三年、二九七頁)や日尾荆山の随筆『燕居雑話』巻三(『日本随筆大成』第一期第一五巻、吉川弘文館、一九七六年)では、天保四年(一八三三)のこととしている。時期や地名から天保三年(一八三二)の誤りと思われるが、雀の習性から翌年にも同様の事象が発生した可能性も否定はできない。
- (15) 『兔園小説別集』下巻(『日本随筆大成』第二期第四巻、吉川弘文館、一九七四年)
- (16) 『甲子夜話続編』第七巻(平凡社東洋文庫、一九八一年)
- (17) 天保三年九月二十六日桂窓宛書状(『馬琴書簡集成』第二巻、八木書店、二〇〇二年)
- (18) 前掲『甲子夜話続編』巻八二
- (19) 『甲子夜話続編』巻八二、一三三頁
- (20) 『兔園小説余録』(『日本随筆大成』第二期第五巻、吉川弘文館、一九七四年)
- (21) 前掲、天保三年九月一六日桂窓宛書状
- (22) 天保三年九月二一日篠斎宛書状(『馬琴書簡集成』第二巻、八木書店、二〇〇二年)では、馬琴は篠斎にも「本郷にて雀戦の事は、桂窓子の状中へくはしく注し置候間、同人より御聞被下」と伝えている。
- (23) 天保四年三月八日篠斎宛書状(『馬琴書簡集成』第三巻、八木書店、二〇〇三年)
- (24) 『兔園小説余録』(『日本随筆大成』第二期第五巻、吉川弘文館、一九七

- (25) 前掲、天保四年三月八日篠斎宛書状
四年)
- (26) 例えば、『宿直草』巻五の「戦場の跡火もゆる事」には、「若江の里」で「元和の軍」で多くの死者が出て以来、「亡魂の今も火となりて燃えていることを伝えている（『近世奇談集成（一）』）国書刊行会、一九九二年、三〇九頁）。
- (27) 宮地正人「幕末の政治・情報・文化の関係について」（同『幕末維新期の文化と情報』名著刊行会、一九九四年、三三二頁）
- (28) 近世段階におけるニュースメディアとして公開される書状の存在は、近代以降の雑誌や現代のラジオなどで見られる投書文化と連続している可能性もあろう。柳田國男と南方熊楠の往復書簡や『郷土研究』が投書により情報収集をしていたように初期の民俗学も同様のシステムに依存していたといえるかもしれない。
- (29) ジャン・ハロルド・ブルンヴァン（大月隆寛ほか訳）『消えるヒッチハイクカー』新宿書房、一九九七年（新装版）、二〇六頁。
- (30) 松田美佐『うわさとは何か』中公新書、二〇一四年
- (31) その広がり確定することはできないが、馬琴に情報をもたらしたのは伊勢松坂の小津桂窓だったことから、遠州見附宿を中心に伊勢あたりから関東圏を中心に広がっていたものと考えておきたい。
- (32) 『閑田耕筆』（『日本随筆大成』第一期第一八巻、吉川弘文館、一九七六年、二二二頁）では寛政七年とする。『筆のすさび』（『日本随筆大成』第一期第一巻、吉川弘文館、一九七五年、一二五頁）は「寛政八九年の頃」とする。
- (33) 『甲子夜話』巻七七（『甲子夜話』巻五、平凡社東洋文庫、一九七八年、二八二～三頁）。鳥の種類については見た人が識別ができなかったと記されているが、『閑田耕筆』がアトリの群飛を報告する寛政年間と時期も近く、場所も同じ京都の嵯峨野なのでアトリだったと思われる。
- (34) 『武江年表』
- (35) 『武江年表』、『日本新聞』第七号、一八六二年一月二〇日（『幕末明治新聞全集』第一巻、大誠社、一九三四年、三五七頁）
- (36) 前掲『日本新聞』第七号
- (37) 国立歴史民俗博物館蔵（H22-2-102）
- (38) ズボンを穿き背囊を背負い、奥で鉄砲を構えている右側のムクドリ側を政府軍に、袴姿のスズメたちを西郷方に見立てていると思われる。
- (39) 『墨東綺譚』「作後贅言」（『日本近代文学大系 第二九巻 永井荷風集』角川書店、一九七〇年）
- (40) 横山泰子「狸は戦い、舞い踊る」（小松和彦編『妖怪文化研究の最前線』せりか書房、二〇〇九年）は、日清戦争期に講談師による軍談がもてはやされるなか、珍しい戦記物のレパートリーとして「狸合戦」を取り入れていたとする（二二二～二四頁）。雀合戦の話題も軍談のマクラなどで、取り上げられていた可能性もあるだろう。

【付記】本稿執筆にあたって、図版使用をお許し下さった国立歴史民俗博物館にお礼申し上げます。

Abstract

Consideration about “Sparrow Battles”

Norio MURAKAMI

This paper discusses a phenomenon called “sparrow battle” in which sparrows flock and fight. Sparrow battles are a common habit of sparrows, as they enter the roost in groups after the autumn. However, since the early modern period it can only be found in the literature around Edo. A letter from Enshu, which first named this phenomenon “battle,” was disseminated in Edo. As a result, the collective action of sparrows that occurred in Edo in 1832 was understood as a “battle.” The regional bias of information is the reason why the areas where sparrow battles are reported were biased.

Keywords: sparrow battle, animal war, letter, Kyokutei Bakin